
わしじゃよわし

朝昼夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わしじゃよわし

【コード】

N5645Q

【作者名】

朝昼夜

【あらすじ】

おれおれ詐欺じゃなくてオレオレ殺人をされてしまった老人の夢想的SS！そう、これは異世界だったんだよ！

pari-n.

何か割れる音が今、聞こえた。居間からだということは確かだと感じたわしは、どっころしよういやあ、といつも通りの掛け声を発してから杖を頼りに部屋の出口に向かい、扉を開き、老化を感じながら廊下を歩き、階段を下りていき、そしてまた老化を感じながら廊下を歩き、ついに到着したわい、と思いつながら居間の扉を、今、開いた。そして居間に足を踏み入れたその一寸の後に、

「じいちゃん、死ぬのか！」

という聞き覚えの無い人の怒声らしき雰囲気のが聞こえてきて、脳天にパリーンという衝撃が響いた。その衝撃は全身に一瞬にして回り、毒のようにわしの全身を痺れさせた。麻痺させた。つまりどういふことかというのと、わしは、パリーンという衝撃によって死にそうになったということだ。

犯人は目の前で花瓶をわしに振り下ろした餓鬼んちよ。それはわしの孫だ。いつも通りの馬鹿面だ。だがいつもと違ったのは、その声質だった。先述したとおり、聞き覚えの無い人の声だったのだ。孫の声を聞き違えることがあるだろうか。オレオレ詐欺にひっかかるわけじゃあるまいし。

そんなことを思いながらわしは地面にひれ伏した。麻痺した全身は重力に抵抗することが出来ずひっぱられてしまうので、倒れることを避けることは出来ないのじゃ。よってしかるに、わしは額を思いつきり地面に打ち付けてしまったので、痛かった。正直、死にたくなった。

「じいちゃん。しっかりしてくれよ。おれだよおれおれ」

お前誰だよ、と叫びたいが口が裂けない限りはそれを述べることはおそらくできない。わしももう年だ。昔はぶいぶい言わせていたのにそれはもう過去で、今は居間で餓鬼に花瓶を割られた上で、な

んかしらないが、オレオレ殺人をされそうになつとる。どうなつとんじゃ。

「勇者よ。もう疲れてしまったのか。セーブを忘れていないな？」
目を覚ますと同時に聞こえてきた声にびっくりして立ち上がると、わしはびっくり驚愕。目の前に女神さまがたつとるじゃないかあ！しかし、女神様はとても美しいが、残念なことに声がいぶし銀だった。

「セーブをした覚えはありません。だってわし、人生やり直したいとか別に思わない側の人だし。女神様はどっち派？」

とりあえず適当にくっちゃべってみると、女神様も適当にくっちゃべりたかつたらしく、

「王道や」

とか言った。わしは驚愕しつつ、杖をぶんぶん興奮気味に振り回してから、

「わ、わ、わしは……………」

と何か言おうとしたが、何を言おうとしたか忘れてしまったので口ごもった。

女神様はそれを見て一瞬呆然としていたが、やがてハハハと笑うと、

「おじいさん、それは痴呆の傾向がありますよ」

と言つので悔しくなつてぎゅつと唇を真一文字に縛った。

「最近、オレオレ殺人が流行ってます」

女神様が言うので、「わし、それで殺されたんじゃ！」と訴える
と、女神さまは目を見張った。

「それは大変でした！」

しかしソノ後には何も言わず、女神さまは行動を止めてしまった。

しばしそれを美しいなあ、しかしいぶし銀な声のだけが残念だ、とおもいながら見つめていたが、おかしいのだと気が付いた。女神さまは、フリーズしてしまったのじゃ。和訳すると凍結じゃ。

まるでわしが時を止めてしまったのかのごとく、女神さまは目を見開いたまま、杖で額を突っついてみても、何の反応もしめさなくなってしまったのじゃった。

何だかつまらなくなったので、わしは雲から飛び降りて、現世に帰った。

気が付くと、オレオレ殺人をわしに決行してきた餓鬼が、家の中の荒らしていて、金目の物を探しているのだなと即座に気が付いた。わしはもう身体が全然軽かったので、起立し、杖を放り投げ、首をポキポキと関節鳴らした直後に、頭突きを餓鬼にかました。

「ぐわっしやああああああああああああああああああああああ」
そんな叫び声を上げながらわしの突進を受け止めきれず壁まで吹き飛び壁の外に飛び出してしまったので、わしも仕方無しに軽く地面を小突いて、吹き飛んだままの彼の背後に一瞬にして回ると、肘内でとどめを刺した。オレオレ殺人をした少年を、返り討ちにしたのじゃ！

牢屋に入れられたわしは、いろいろと納得のいかないこともあったので、「こつから出せやコラ！ああ！？まじ、ゆるさねえかんない！」と看守に脅しをかけてみたが、看守はそれでぶち切れてしまい、わしをお置き部屋に連れて行ったのだった。

そこには悪魔がいた。五歳だという。まだまだ餓鬼じゃないか、とけなすことはできない。悪魔をけなす勇氣は無かった。

「ま、そこに腰を下ろせよ」

たばこをくゆらせている不健康児の彼を見ていると無性にムズムズしたので、わしは「たばこ、わしにも吸わせてくれんかのお」と

尋ねた。だが五歳児悪魔は、

「じじい。食うぞ」

と行って取り入ってくれない。仕方が無いので、わしは沈黙して、彼の向かい側に座った。

悪魔は特に何もしなかった。

「飯、くうか？」

などといって、自らの触覚をちぎり、わしに差し出したりした。食べてみると、意外とこれがまずくて、ゲロを吐いてしまった。

結局、それによってぶち切れてしまった悪魔に殴り飛ばされて、わしはまた死んでしまったのじゃ。

「もう。何回殺されるねん。わたしは王道派だから！」

という女神様は相変わらず、いぶし銀じゃ。けどわしはわしのままじゃ。いつだってわしはわしじゃ。そういうわけで今日も、わしは生きている。いぶし銀の彼女の目前でひれ伏して、今日も元気に生きている。ばあさんがかつて居た時に、わしは息子と娘を呼んで目の前で説教をし、そしてソノ後に順番に彼女らを殴った。そんな記憶がなぜか甦るのは、何か今の状況と関係があるだろうか。そういうえば、わしは今日からわしだ。空の上で、雲を纏いながら、杖をつきながら女神様の前でひれ伏している。だが、本当にわしはわしなのだろうか。わしはもしかするとわしじゃないかもしれない。だって、老人、というだけなのなもの。わしはなんなのだった。なんていうことだ。わしはわしの個性をなくし、アイディンターが皆無なわしじゃ。明日も明後日もきつとこの調子じゃ、こまっちゃうだけじゃないか。

「女神様、なんとかしてくださいえ」

彼女は真つ黒な鎌を砥石で砥ぎながら、わしに向かって冷酷な調

子で返事を渡した。

彼女は非常にいぶし銀で、その声はわしを何か救済してくれるような気分になった。

「お前は最初から、救われてなんかいいえ」

真実を言ったかのごとくの強気の姿勢で、しかもいぶし銀。そんな女神様の言葉の格好よさに憧れを感じたので、わしは心が鳴いた。心が咆哮した。魂の慟哭じゃった。

「わしはわしだったんじゃないよ！何が個性じゃ！何がアイデンティティじゃ！オレオレ殺人じゃ！わしはわしだったんじゃない！わしの目の前に何時だつて視界は広がっていったんじゃない！今日からは立派に生きよう！死ぬまでわしはわしでいよう！これが真実だったんじゃない！どうしようもないほど情熱に塗れている、揺るぐことの無いがしかし曖昧な、わしにとつての真実だったんじゃないよ！ さあ、女神様、審判を下してくださいえ」

老人の懇願。それに対して美しい微笑みを浮かべた女神は、ゆっくりと玉座から立ち上がると、砥石を置いた。そして、てこ、てこ、と老人に近づき、老人が涙を流しながら前を向いたその時、彼女は漆黒の鎌にて、老人の首を刈り取るという執行を為したのであった。

今際の言葉は、

「ひゃあ」

で、あった。

(後書き)

シュールレアリズムという感じになりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5645q/>

わしじゃよわし

2011年2月1日13時10分発行